

## 国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について (下)

藏 中 さやか

**On Kumidai Shusei (A Compilation of the Sets of Combined Themes of Waka)  
in the Collection of the National Museum of Japanese History: Part II**

**KURANAKA Sayaka**

### Abstract

This paper deals with a volume of a compilation of *kadai* (given theme of *waka*) and examines its contents to study the world of *kadai* collection in the Middle Ages. The existing research of the compilation of *kadai* has focused on its value as historic data. However, I would like to take a different point of view, to give a concrete account for the mutual relationship between the compilations. The subject here is a copy of *Kumidai Shusei* (A Compilation of the Sets of Combined Themes of Waka) in the Takamatsunomiya Collection of the National Museum of Japanese History (copied in the early Edo period, referred to as vol. 1 of 2 vols. 1249 [Mi-box 57]). The volume is an assembly of seven compilations all together, each of which is identified as a collection of *kadai*, concerned with the theme of *waka*. It is a valuable material including the two collections organized in the Muromachi period. Through the comparative analysis of each compilation with others concerning *kadai*, this paper clarifies the structure and notable points of each collection. The current paper, Part II, dealing with the latter half of the volume, is a sequence to Part I published in the previous number.

キーワード：中世、和歌文学、題詠、歌題、組題

**Key words:** the Middle Ages, *waka* literature, *daiei* (composition of *waka* with a given theme), *kadai* (given theme of *waka*), *kumidai* (set of combined themes)

# 国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について(下)

## 蔵 中 さやか

### はじめに

本稿は、本誌前号(第57号第1号)に掲載した「国立歴史民俗博物館蔵『組題集成』①について(上)」の後半部分である。前稿では紙幅の関係上取り上げられなかった部分を、便宜上、**C****E****D**の順で論じる。尚、**E**「袖中題鈔」については拙稿「版本『和歌組題集』の祖型をめぐって—中世歌題集成書『袖中題鈔』の利用—」(『国語と国文学』平成二二年六月号)に触れる部分があるので、既述の事柄は極力割愛して述べることにする。

### 一 **C** についで

収載項目は全百項目で、冒頭の五十首題一項目と末尾の三十首題・十五首題各一項目の計三項目を除くと、整然とした分類意識のもとに配列・構成されている。春夏秋冬各部は十首題・十五首題・二十首題・三十首題、冬部は十首題・十五首題・二十首題・五十首題の順で、さらに四季

部として十首題・二十首題・三十首題・五十首題・百首題が続き、全収載数は一〇一項目。内、二項目は脱落部分にかかっているため不完全な形であり、その間に数項目の脱落部分があると推定される。百首題に入るまでの部分は後述するように、内容・配列の上で**E**と共通するところがあり、冒頭五十首題と末尾百首題部分が独自部分となる。この五十首題は詠作年次が特定できないが、『増補和歌明題部類』に天和三年(一六八三年)の「六朔住吉御法楽 勅題」としてみえる組題等とはほぼ同じ題であり、江戸期に転用されたものと考えられる。<sup>(注1)</sup>

冒頭に記される「以桂林一枝昆山片玉写之」中の「桂林一枝昆山片玉」は『晋書』<sup>げきしん</sup>郗詵伝に由来する表現で、与えられた官職に対しわずかな出世に過ぎないと暗に不満を示す折に用いられることが多いが、<sup>(注2)</sup>ここでは、膨大な中からわずかな部分のみを書写した、という意で原義のままに記されているのであろう。書写位置に不審があり、本来は直前に書写されたものの奥書として記されていたものが、転写される過程で**C**冒頭に記されるようになったものかとも考えられよう。次に記す奥書部分で年月日を示す末尾一行のみが改訂して書かれていることもその可能性を示唆する。とすれば、**B**の内題が「心種部類抄抜書」で書き抜いた

ものであることを示すことと呼応する表現となるが、断定はできない。

奥書には

已上

以豊前守平頼亮本書写之加校合畢 一(改丁)

明應二年閏四月廿三日

とある。「明應二年閏四月廿三日」より成立は「明應二年」(一四九三年)以前となる。年月日を記す行のみ次丁にわたるが、これは、書写の際、余白部分が不足し次丁に及んだものであろう。

伝来の不分明なものがほとんどである歌題集成書の中にあつて、この奥書は貴重である。豊前守平頼亮は為広・実隆らと親しく交遊した幕府奉行の松田頼亮のことで、永正八年(一五一一年)八月二四日に船岡山にて戦死と伝えられる。<sup>(注3)</sup>この奥書は武家歌人層にも歌題集成書が流通していた証左となるものである。

数項目にしか付されていないが詠作機会を示す注記がある。収載題数を示す部分とともにすべて掲出すると以下の通り。

- 90 三十首 飛鳥井垂相禅門出題文明十四年七月將軍家
- 91 五十首 光台院五十首
- 92 百首 イ出題入道右大弁光俊朝臣
- 94 百首 京極黃門
- 95 百首 慈鎮和尚
- 101 十五首 水無瀬殿御哥合

90以下、末尾に集中している。91以降は後述の通り、鎌倉期の詠作機会を示すもので、末尾部分はまとまって増補されたものと考えられる。

このうち特に注目したい注記は90の「飛鳥井垂相禅門出題文明十四年七月將軍家」である。本文は次の通りで「遠村煙織」題に対して順異同を示す補入符があり「〇イ」と対応している。

90 三十首 飛鳥井垂相禅門出題文明十四年七月將軍家

梅香留袖 荻音近枕 水郷柳 古郷萩 春曙

秋夕 盛花 明月 暮春鶯 晚秋鹿

早苗多 寒草少 雲間郭公 雪中待人 照射

網代 曉蚊遣火 深夜埋火 貴賤夏祓 都鄙歲暮

寄風恋 〇松風入琴 寄煙恋 遠村煙織 寄山恋

山路旅行 寄草恋 草庵貽夢 寄鏡恋 對鏡悲老

垂相(大納言)は飛鳥井雅親(榮雅)のことを指すが、この催事について、井上宗雄『中世歌壇史の研究室町前期「改訂新版」』(風間書房昭和五九年)二七五頁に次のようにある。<sup>(注4)</sup>

將軍家歌合 文明十四年閏七月 類従所収。親長・長興・政家の各

日記や常徳院集によると、七月廿五日題が頒けられ、廿六日義尚の小河邸で褒貶形式で行われた。後書によると榮雅が閏七月叡山東坂本で判詞を記したので、閏七月の成立といわれるが、歌合の結番披露は七月廿六日である。三十人の作者が三十題を分けて各一首ずつ詠じて十五番した、所謂異題歌合。(中略)読師教秀、講師貞頼。榮雅の判詞は、左右の難陳をよくさばいて円熟老練の所を見せている。この部分が後の補筆ではなく明應二年の書写時点に存在した本文であれば、催事のあった「文明十四年」(一四八三年)七月以降、頼亮本を書写するまでの十年ほどの間にこの書が成立したこととなる。「三」に

述べるように、この部分は注記を伴わない形でE「袖中題鈔」にも存在し、同書の成立も一四八三年以降かと考えられる。

91より後の部分について、注記と収載される歌題から『明題部類抄』(略号:明)・『類題鈔』(略号:類)等を参考にその詠作機会を推定し、一覧すると次の通りである。

- 91 道助法親王五十首 承久元年 明・類  
92 四季百首 入道光俊朝臣出題 詠作年次未詳 明・類  
93 入道前大納言為家卿一夜百首 詠作年次未詳 類  
94 一字百首(京極黃門) 詠作年次未詳 明(「出題不知之」・類(「京極黃門」一説光俊入道(朱)の傍書あり)  
95 一字百首(慈円) 建久元年頃か 明・類  
96 後京極摂政家百首 文治三年 明・類(「大式入道出題云、」  
97 後法性寺入道関白家百首 治承年間 明・類(「治承 後法性寺入道前関白家于時右大臣」)  
98 洞院摂政家百首 貞永元年 明・類  
99 後京極摂政家二夜百首 建久元年 明・類  
100 三十首 詠作年次未詳  
101 後鳥羽院水無瀬殿十五首 建仁二年 明・類
- 以上、100を除くと、先行する歌題集成書に収載されながら含まれていなかった鎌倉期の組題を増補したかと考えられる。また100についてもG「名題集拔書」・「明題古今抄」・「版本和歌組題集」等には載ることから、他書との接触によって補われた可能性が高い。

## 二 E「袖中題鈔」について

Eは、内題に「袖中題鈔」とあり、奥書はない。本書については「はじめに」に述べたように既に取り上げたことがある。『袖中題鈔』は、『名題集拔書』とともに、これまでその書名が目録中に見られながら実態が確認されない書であった。また『袖中題鈔』に増補を加えた形態の歌題集成書が『出題次第』『明題抄』『名題抄』といった外題を与えられ今日に伝わることも明らかになった。本稿次節以降ではこのうち『明題抄』(書陵部・56830—656、延宝三年鷹司房輔写)を比較対象として参照しつつ論を進めたい。

本文は一行に三題を配する形で、春部は十首題・十五首題・二十首題・三十首題・三十六首題、夏秋各部は十首題・十五首題・二十首題・三十首題、冬部は十首題・十五首題・二十首題・五十首題の順で、さらに四季部として十首題・二十首題・三十首題・五十首題・百首題が続き、末尾に祝の一首題を載せる。全収載数は一〇四項目。内、冬部二十首題に目移りによる脱落がみられる。

## 三 CとE「袖中題鈔」について

本節ではCとE「袖中題鈔」の関係について述べる。『明題抄』(書陵部・56830—656、延宝三年鷹司房輔写)も比較のため加え、C・E「袖中題鈔」・「明題抄」の構成を表にすると次の通りになる。

部立	題数	E袖中題鈔	C	明題抄 (書陵部本)
秋	十首	53	41	55
		54	42	56
		55	43	57
		56	44	58
		57	45	59
		58	46	60
		59	47	61
		60	×	62
		61	×	63
		62	×	64
		63	×	65
	十五首	64	48	66
		65	49	67
		66	50	68
		67	51	69
		68	52	70
		69	53	71
		70	54	72
		71	55	73
		72	×	74
	二十首	73	56	75
		74	57	76
		75	58	77
		76	59※1	78
		77	×	79
		78	×	80
		79	×	81
		80	×	82
		81	×	83
		82	×	84
冬	十首	83	60※2	85
		×	61※3	×
		×	×	86
		84	62	87
		×	63	88
		85	64	89
		86	65	90
		87	66	91
		×	67	92
		×	×	93
	十五首	88	68	94
		89	69	95
		×	70	96
		×	71	97
		90	72	98
		×	73	99
		91	74	100
		×	×	101
	二十首	92	75	102
		93	76	103
		94	77	104
		×	78	105
		×	79	106
		×	×	107
		×	×	108
	五十首	95	80	109

部立	題数	E袖中題鈔	C	明題抄 (書陵部本)
(四季)	五十首	×	1	×
春	十首	×	×	1
		×	2	2
		1	3	3
		2	×	4
		3	5	5
		4	6	6
		5	4	7
		6	×	8
	十五首	7	7	9
		8	8	10
		9	9	11
		10	10	12
		11	11	13
		12	×	14
		13	12	15
		14	×	16
	二十首	15	13	17
		16	14	18
		17	15	19
		18	16	20
		19	17	21
		20	18	22
		21	19	23
		22	×	24
		23	20	25
		24	×	26
夏	三十首	25	21	27
		26	22	28
		27	×	29
		28	23	30
		29	24	31
		30	25	32
		31	26	33
		32	27	34
		33	×	35
		34	×	36
	十五首	35	×	37
		36	28	38
		37	29	39
		38	30	40
		39	31	41
		40	32	42
		41	×	43
	二十首	42	33	44
		43	34	45
		44	35	46
		45	36	47
		46	37	48
		47	38	49
		48	39	50
		49	×	51
		50	×	52
		51	×	53
	三十首	52	40	54

部立	題数	E「袖中題鈔」	C	明題抄 (書陵部本)
四季	十首	96	81	110
		×	82	111
		97	83	112
		×	84	113
		98	85	114
		×	86	×
	二十首	99	87	115
	三十首	×	88	116
		100	89	117
		101	90	118
雑	三十首	×	100	119
		×	91	120
		102	×	121
		103	×	122
	五十首	×	92	123
		×	93	×
		×	94	×
		×	95	×
		×	96	×
		×	97	×
		×	98	×
		×	99	×
	十五首	×	101	×
	一首	104	×	124

注：部立名はすべて小書き  
※1 6題目まで。以後脱落。  
※2 末尾5題のみ残存。  
※3 合点、注記あり。

〔C〕の冒頭の五十首題(①)と春十首題(②)の計二項目、さらに末尾の百首題集成部分(92〜101)を除いた形態が〔E〕「袖中題鈔」に類似するが、そっくり同じというわけではなく、特に秋部末尾は〔C〕にはなく〔E〕「袖中題鈔」のみにある。これは、両者の異なり方が、春・秋部と冬部以降とはその傾向に顕著な違いがある点と関わることかと推測される。

春・秋部は、冒頭部分と特別な事情が考えられる61を除くと、〔C〕が本文を欠く場合のみである。〔E〕「袖中題鈔」のみが本文を持つ部分は、概ね各項目の末尾であり増補部分であるかのような印象を受ける。ところが、〔C〕が大きく本文を欠く秋部末尾に続く冬部以降は様相が逆転する。冬部以降は〔E〕「袖中題鈔」に本文を欠く場合が多く、また末尾の百首題部分は〔C〕だけに、一首題部分は〔E〕「袖中題鈔」だけに存在する。

比較対象として示した『明題抄』(書陵部・56830—656、延宝三年鷹司房輔写)の状況を重ねてみると、同書は春・秋末尾までは〔E〕「袖中題鈔」とほぼ一致するものの、冬部以降は一致せず、〔C〕のみに存在する部分を持つ場合もみえる。また93・101・107・108のように〔C〕・〔E〕「袖中題鈔」双方が欠く独自項目も有していることがわかる。

つまり、〔C〕前半(春・秋部まで)は〔E〕「袖中題鈔」を遡及する本文かと考えられるが、秋部末尾から続くその後半(冬部以降)は逆に〔E〕「袖中題鈔」から『明題抄』への過渡期に存在した本文のようにみえる。なぜこのような本文形態が生じるのかは説明し難いが、『明題抄』との比較からは、古態を留める前半と増補過程にある後半とが取り合わされている、ということが言えよう。尚、〔C〕秋部の本文を欠く部分を脱落と判断すると、二丁分かと想定される。

〔E〕「袖中題鈔」と『明題抄』には存しない〔C〕の独自部分は冒頭と末尾を除くと61と86である。86は『明題部類抄』『類題鈔』にも載る建仁二年三月の新宮撰歌合題で、著名ながら抜け落ちているものを補充した、ということであろうか。秋部末尾に位置する61は〔C〕では三十首題として掲出されるが、合点(墨)と注記(墨)がありそれに従えば二十首題となる。本文は次の通り。

#### 61三十首

朝露結来	暮風過空	行人隔霧	古壁蛭	寢覺聞雁
鹿声近枕	草花更色	夜、擣衣	籬下槿	田家電光
秋田時雨	晴夜月	陰夜月	路頭月	寢所月
在曙月	遠樹梢漸紅	菊花思昔	羈旅暮秋	山家九月尽

初欲出詞恋、忍忘、聞久、隱在所、適逢、  
見増、互別、恨隱、契変、絶久、

古渡雲 薄暮遠烟 河辺鳥 海懷旧 名所述懷 二十首也  
合点■二加也

〔E〕「袖中題鈔」・「明題抄」には三十首題は載せないが、次のように〔C〕で合点のつく題だけを二十首題（それぞれ79と81）の配列の中に収載している。〔E〕「袖中題鈔」が冒頭にあるべき「二十首」という表示を欠く点是不審で、本来三十首題であったものが本文の乱れ等により二十首題として編成し直された可能性も窺わせる。

〔E〕「袖中題鈔」79／「明題抄」81二十首

朝露結来 行人隔霧 古壁蛩

夜擣衣 秋日村雨 晴夜月

陰夜月 寢所月 羈旅暮秋

山家九月尽 忍忘恋 隱在所、

適逢、 互別、 恨隱、

古渡雲 薄暮遠烟 川辺鳥

海辺懷旧 名所述懷

また三十首題である〔C〕100は、〔E〕「袖中題鈔」にはなく「明題抄」では雑部冒頭にある。構成上はこちらのほうが適當であることから表中ではこれに合わせたが、原態がどちらであるかは不明である。〔C〕の末尾101は「水無瀬殿恋十五首」題であるが、〔E〕「袖中題鈔」・「明題抄」はこれをもたず、一首題の集成が末尾となっている。

以上、〔C〕は、大きく捉えれば〔E〕「袖中題鈔」と同類の書と言えようが、「組題集成」①に各々書写されるように、両者は別書として伝来し

たものである。冒頭、末尾の構成上の違いに加え、〔E〕「袖中題鈔」の一行あたり三題を書写するゆつたりとした書きぶりも両者の重なりを感じにくくさせる要因の一つである。

『袖中題鈔』という固有名称が、編纂及び流布過程のどの時点で与えられたものか定かではないが、この系統の歌題集成書は複数の写本が現存しており、ある程度流布し利用されたものと推察され、それ故、江戸期版本の『和歌組題集』に組み込まれたものであろう。

四 〔D〕について

奥書に

雖有不審本任本写之多分家、自筆本也

文明十三年初秋書之 洛外老拙持教判

とあることから、その成立は文明十三年（一四八二年）初秋以前かと考えられる。持教は、古筆鑑定家によって「三井寺法印持教」と記され、文明十年（一四七八年）八月十五夜住吉法樂として詠じた「詠八月十五夜百首歌」（古典文庫『中世百首歌四』所収）で知られる人物か。<sup>（注8）</sup>

〔D〕の構成は各項目の歌題配列から次の通りであることがわかる。

◎構成

- |            |       |           |
|------------|-------|-----------|
| 1 良経十題百首   | 建久二年  | 注記「後京極」   |
| 2 堀河百首     | 長治二年頃 | 注記「堀河院初度」 |
| 3 後嵯峨院初度百首 | 宝治二年  |           |
| 4 藤川百首     | 元仁元年頃 |           |

5 光明峰寺入道撰政家百首 建保三年

6 中務卿親王家歌合 文永八年

7 為忠家後度百首 保延元年

8 一句百首 建久元年 注記「仮名題」

9 百首 未詳

10 百首 未詳（『組題集成』②の58と同じ）

11 月次題

全十一項目中、十項目目まで百首題を配する小規模な書で、その編纂意図は百首題の収集にあったのであろう。1～8までの八項目はすべて『類題抄』に含まれ『明題部類抄』にみえるものもある。9・10が詠作機会未詳の百首題であるが、10は、『組題集成』②にも収載される。詠作機会を注記するのは1・2・8で、内容は「◎構成」中の「」内に示した通りである。

詠作機会が未詳である9・10については、本文を以下に掲げる。

9 百首

春

貴賤迎春 霞中子日 浦瞿<sup>（マヤ）</sup> 行路摘若菜 澗残雪

梅有遲速 山家柳 樵路早蕨 旅泊春月 棧春雨

湊帰雁 聞法待花 与女見、 向花恋友 落花未遍

花浮澗水 躑躅紅 庭款冬 岡藤 閏三月尽

夏

林早夏 卯花誰家 夢中聞郭公 市、 荇菖蒲

廬橘薰簾 江五月雨 隣家水鶏 杜夏草 暁照射

遠村蚊遣火 緑池紅蓮 嶋蛸 泉声来枕 六月祓

秋

立秋天 雨中七夕 客衣露重 寢覚萩風 萩満野径

水辺女郎花 菊遅日淀 田家種 聞虫 近初雁

鹿聞両方 曉霧隔舟 家、待月 対月調吟 月不処処

毎秋同月<sup>下上巻</sup> 月前遠望 野擣衣 橋辺菊 深山尋紅葉

冬

嬌閨冬来 舟中時雨 霜隠落葉 池寒芦 水漸氷

海路千鳥 霰乱枕上 雪満高低 遠嶋雪 暮鷹狩

遠炭竈 閑居炉火 神楽及曉 佛名 老後歳暮

恋

被空中人恋 忍不逢、 度、返文、 失返事、 待■約、

深夜帰車<sup>返</sup> 到門帰、 日夜無来、 希逢後朝、 曉聞鏡欲帰、

依恋閉門<sup>（マヤ）</sup> 解事不忘、 観身不言、 契二世、 恨変契、

隔我家聞他、 隠在所、 隔雨、 厭老、 隔物逢、

雑

山家経年 田家老■ 名所湊 山中瀧水 遊女棹舟

■谷風 竹遐年友 与鶴争齡 杜頭曉祝 本三首不足

10 百首（『組題集成』②の58と同じ、部立名「春」脱）

名所立春 山霞猶薄 鶯晚出谷 餘寒有樹 庭草始青<sup>緑</sup>

春雪照松 臘月照花 梅花近客 翠柳塵煙 山村待花

閑庭葦草 花旦施勾 花色似雲 落花猶薰<sup>後大巻</sup> 落花泛水<sup>後大巻</sup>

池辺藤花 故郷款冬 月前帰雁 春月易曙 閏三月尽



夏

名所卯花 菖蒲薫風 故郷蘆橘 曉待郭公 、、来鳴  
 曉聞、 浦五月雨 松下納涼 旅行夕立 雨後夏月  
 荒籬常夏 水村水鷄 急雨過里 百合草花 微涼漸至

秋

田家早秋 織女後朝 秋風始到 白露曉生 海村夕霧  
 萩風索、 草花綻露 隔林聞鹿 野径松虫 月前旅雁  
 故郷秋月 夜深待、 閑庭見、 明月離雲 月前擣衣  
 林葉漸黃 深山紅葉 、、添雨 籬菊露涼 山里暮秋

冬

閑居迎冬 時雨回山 夜間落葉 、、浮水 深山寒草  
 松間冬月 林亭寒、 杜頭初雪 寒鳥鳴月 月色冷色  
 雪色似花 微霰落竹 池上薄氷 山路微雲 閑居送年

恋

初通書恋 忍歷年、 来不会、 忍人目、 聞鐘切、  
 互適心、 絶音信、 契送年、 逢夢恨、 無返礼、  
 恨不忘、 殘形見、 遇不言、 涙欲乾、 ■析残、

雑

曉更述懷 松影浮水 翠竹常煙 漁舟見浦 旅宿伴月  
 湖上見、 山居送年 潮声入枕 流水近忘 鶴去水渚  
 往事如夢 開書懷古 閑居懷旧 絃哥調月 逢友述志

また最終項目「月次題」は、月毎に三題、一九題の歌題（すべて素題）を掲げる。例として一月と五月を示すと次の通りである。

正月

子日 若菜 祝言 残雪二月通 梅同  
 柳同 餘寒同 松寄祝 竹同 鶯三月通  
 立春付年中立春 早春

五月

端午 蟬 螢 早苗 五月雨  
 照射 鵜河六通 百合草花 夕立六通 蚊遣火六通  
 橘 樗

「正月」の「残雪」題に小書きで「二月通」と記すような注記が多くあり、この部分は二つの催事毎に歌題を示したのではなく月毎にふさわしい素題を列記したものである。このような形式が中世の歌題集成書の一部に含まれるのは珍しく、後代の『和歌掌中類題集』（寛政八年刊）等にみえる形に通じるものである。

おわりに

前号掲載の（上）と合わせ、『組題集成』①に含まれる七篇の歌題集成書及び歌題に関する書について、考察を重ねた。同書の資料的価値は極めて高い。歌題集成書というジャンルのみならず、題者の資格、出題の方法等、出題史を探る上でも有用なものとなろう。

井上宗雄氏は歌題集成書の出現について、「歌壇の広がりと共に和歌の催しが頻繁になり、歌集も多くなると、人々が歌会や定数歌を行なう折に、有名歌人に出題を請うことも多くなったのであろう。そこでむし

る歌を伴わない、歌題のみを集成する書が編まれるようになったのではあるまいか」(「歌題に関する書をめぐって」『和歌 典籍 俳句』(笠間書院 二〇〇九年、『徳川黎明会叢書 和歌篇五』「月報10」(九〇年八月)再録)という見通しを示すが、特に至町後期において、夥しく歌題集成書が出現する背景には、地方歌人層の拡がり、というこの時期特有の事情、側面を考えるべきではなからうか。新興歌人層と指導者を結ぶものとして歌題集成書が果たした役割については今後考究を重ねていきたい。

## 注

- (1) 『増補和歌明題部類』に収載する江戸期の組題の多くが既に『明題部類抄』等、先行する歌題集成書にみえるものであることは井上宗雄氏に指摘があり、この場合もそれにあたる。
- (2) 『晋書』晋書卷五十二列伝第二十二。本文は「臣拳賢良对策、為天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉」。本誌前号4頁に当該箇所の写真版掲載。
- (3) 頼亮については井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期(改訂新版)』(明治書院 平成三年)一二一・一五四・一六五頁参照。
- (4) 六〇五頁にも記述がある。
- (5) 後京極摂政家百首題であることも考え得るが、「釈教」の五題の内訳を載せないことから後法性寺入道関白家百首題と判断した。
- (6) 但し本文異同があり、明・類は「桜」を「梅」とする。「桜」が誤りか。本文は次の通り。
- (7)

三十首 雑  
曙雲 夜雨 遠煙 閑暁 幽夕  
湊浪 濱水砂 深江 迅瀬 細径  
湖上 磯辺 溪梯 麓庵 杣山

- (8) 山畑 檜原 杵原 蓬生 杜樹  
峯松 道芝 深草 岡葛 浦鶴  
河鷗 洲鷺 枕塵 窓灯 釣舟  
同じ三十首題は、『明題抄』(書陵部・56830-656、延宝三年鷹司房輔写)・『明題古今抄』等にみえ、『松下抄』(豊原統秋の家集)中の「雑三十首歌よみ待る中に」(805-816)が逸文資料かと考えられる。
- (9) 持教については、古典文庫『中世百首歌四』解題及び井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期(改訂新版)』(風間書房 昭和五九年)四八三頁等参照。

同書前半部は、目録に「正月題」「二月題」(下略)と示す通り、月毎に素題を大分類に立て、その素題を含む複合題を集成する形式をとる。冒頭本文は次の通り。

○春 むつき正月を云

立春 立春天 立春日 立春風(中略) 若水 元日 初春都  
初春 初春霞 初春山(中略) 子日 子日松 雪中子日(下略)

三村晃功『近世類題集の研究—和歌曼陀羅の世界』(青簡舎 平成二二年)参照。

- 「付記」 本稿は、平成二〇年度～二二年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。

(原稿受理二〇一〇年九月二二日)